

# Abstract

AROMA RESEARCH No.56(Vol.14 No.4)

匂いは、ヒトの気分や行動をどの程度まで変えることが出来るのか？

菅原 芳明

---

＜要旨＞

匂いがヒトの気分を変えたり、ヒトを身構えさせたり（警戒態勢）、また性的な興奮を引き起したり等々、このような用例を記した文献は多数に上る。芳香やルームフレグランス、またお香が、古代より、ヒト自身を“装う”ものとして、また生活空間を“彩る”ものとして用いられて来たのは事実である。現代でも、エッセンシャルオイルは、アロマセラピーやアロマウエルネスの視点から広範に用いられている。このような状況の下、次のような疑問が湧いて来る：「匂いは、しばしばヒトの気分や行動を変え得るが、このような際、大脳は、どのような仕方で匂いや気分ならびに行動の関係を調整しているのか？」；「匂いは、どの程度までヒトの気分や行動を変え得るのか？」。著者らは、21種類のエッセンシャルならびにリナロールとその3種類の光化学異性体を用いて、被験者が感じた「香り」印象“”をSD法に基づいて設定した13の印象項目各々のアップ・ダウンとして切り取る（「官能検査手法」）一方、6チャンネル皮膚温度計を用いて左手手指の「皮膚温度計測実験」を実施して来た。本稿では、上記「官能検査手法」ならびに「皮膚温度計測」から得られた最新のデータをバックグラウンドに、「匂い（香り）は、ヒトの気分や行動をどの程度まで変えることが出来るのか？」について、”verbal”（官能検査手法）ならびに”non-verbal”（皮膚温度計測）な視点からの概説を試みる。

＜キーワード＞

官能検査、エッセンシャルオイル、リナロールと3種類の光化学異性体、皮膚温度計測